

38
光村 小国 530

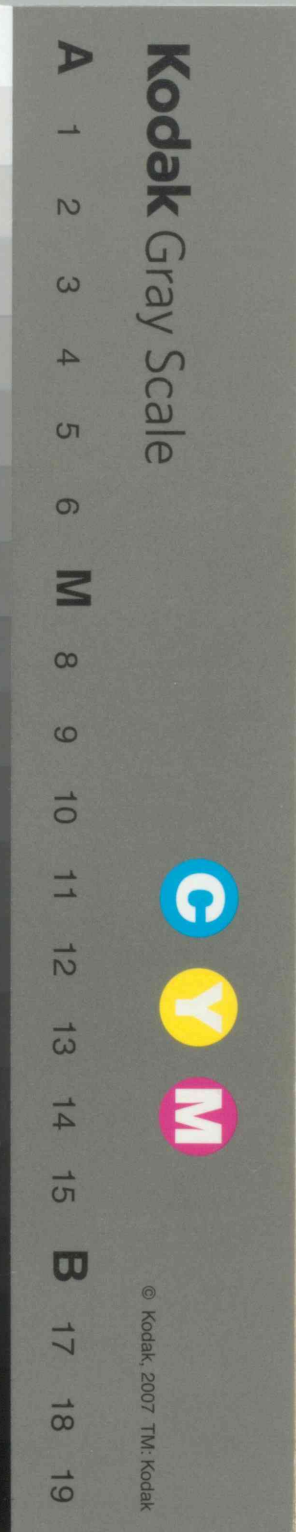
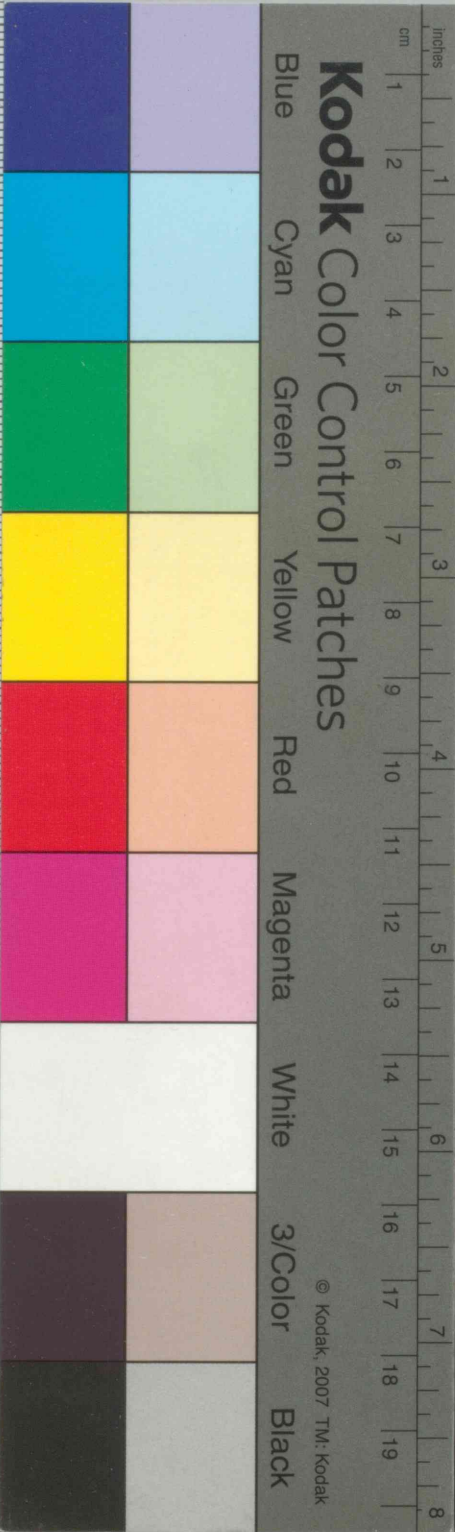
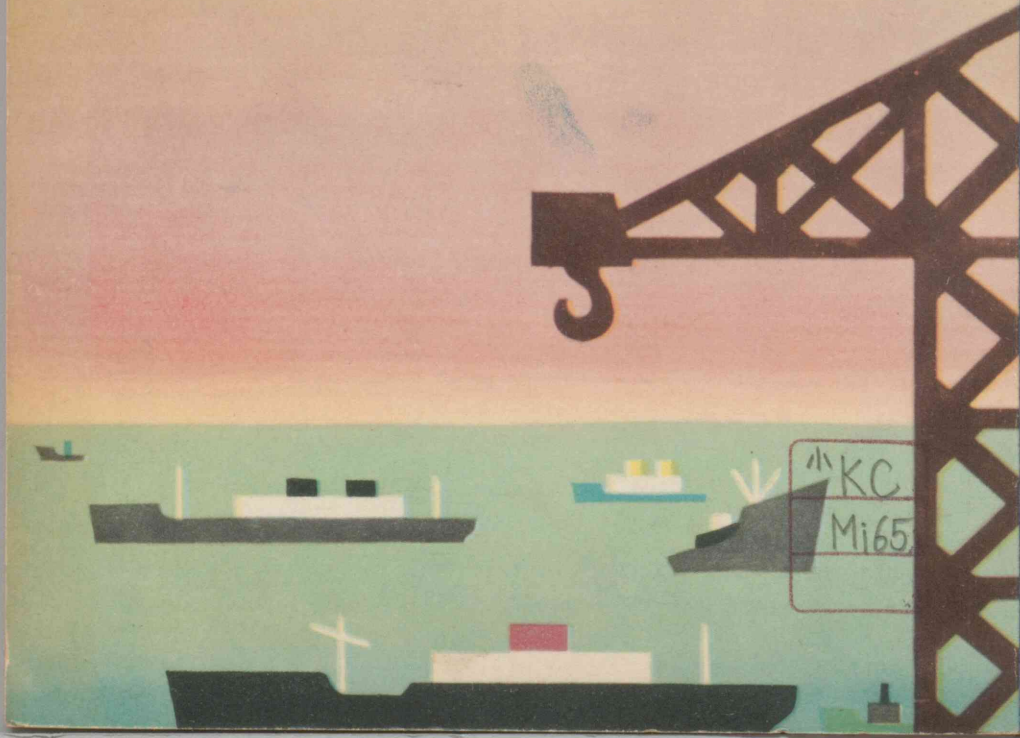
垣内 松三 著

日本の朝

新国語 五年 下

文部省検定済教科書

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449806



60255

教科書文庫

6
810
34-1950
0130449806



指導者のために

(一) この本は、上巻の趣旨を現代日本の諸相に総合し、現実の生活経験を省みて祖国再建の精神を養いながら、身心の発達に即して国語学習における諸作業を自発的創造的に導くように組織し編集してある。特に言語活動を中心として、理解と表現の学習が興味のうちにも有機的発展的に行われるように努めた。

(二) この本の内容は、次の三つの題目に分かれている。

一 つづぎの種から

文化の根源をなす教育に取材し、クラークの教育とその教育によつて文化の開拓に当つた人々の大要を示し精神と言語を直結して言語機能を理解することにする。

二 宝石のように

言語の機能を中心に、現実生活における実務的表現から人生的芸術的表現に至るまで、効果的に使用する言

語活動の能力を理解する創造的な表現力を養ふこととする。

三 日本の朝

本年の趣旨を総合して、平和国家を建設するた
思考と生活の方法として民主主義の理解を深め
ら、言語文化の新生の自覚に導くと共に、新学年
える心構えを整えることにする。

(三) この本に提出した新出語は二六四語で、毎ページの新語率は三・三〇語である。各課ごとに学習の仕方を示して度の向上に努めるとともに、新語表・新字表を掲げて使用上の便を図ることにした。

(四) この本のさし絵は、学習上重要な位置を占めるので、特別な考慮が払われている。

(五) この本の使用期間は、だいたい一月から三月までを目標として、大題目を平均一か月あてとしたが、それを固執する必要はない。地方の実情と児童の個人差を考慮して有効に使用されたい。

(右は本書の大要である。詳細は新国語指導書を参照されたい。)

0130449806



昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

教科書文庫

6

810

34-1950

0130449806

日本の朝

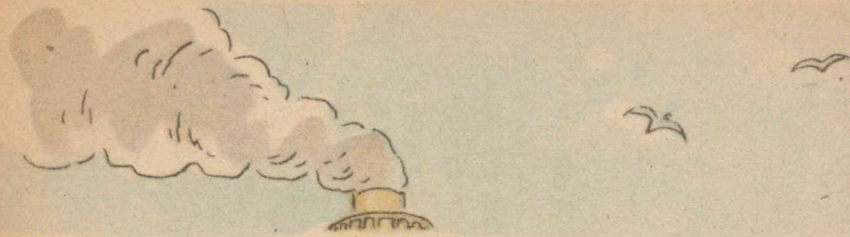


新国語 五年 下

広島大学図書

0130449806





目次

一 一つぶの種から……………4

(一) この一言

(二) 教えの力

二 宝石のように……………29

(一) 短いことば

(二) 心の形

ふきのとう

水の音

文は人なり

三 日本の朝……………54

(一) 東京だより

(二) 朝がくる

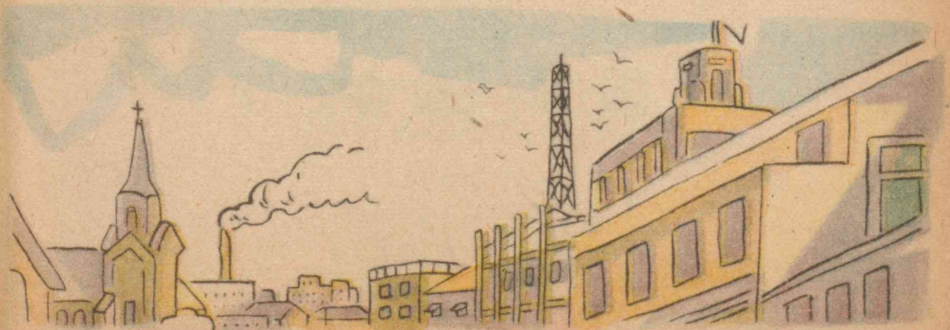
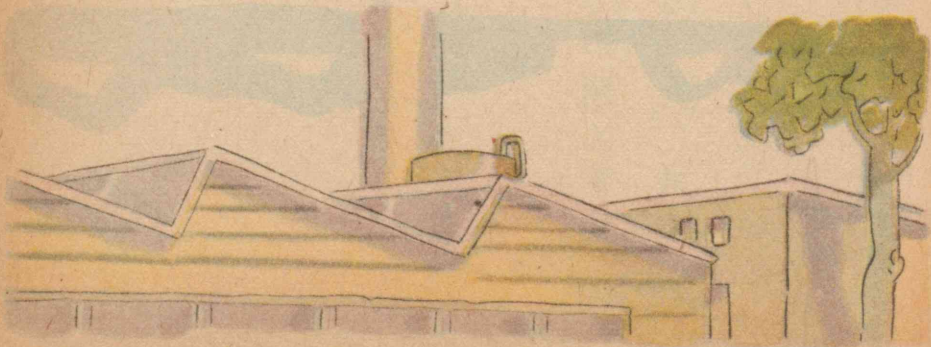
谷あい

海べで

日本の朝

新しいことば
漢字表

81



一 一つぶの種から

(一) この一言

明治初年のころ、北海道はまだ原始林におおわれていた。こ
こをりつばな耕地にすることは当時の急務であったが、どのよ
うにして開拓するかが問題であった。

それには、風土が北海道とよくにているアメリカの開拓事業
を見習うのが、何よりも早道であるということになった。時の
開拓次官であった黒田清隆が、その任務を帯びてアメリカにわ
たつた。

黒田次官は、まず、グラント大統領をおとずれて来意を告げ、

よい指導者を派けんしてくれるようお願い
した。

グラント大統領は、農商局長のケプロン
氏にこのことをたのんでくれた。ケプロン
氏は、そのころすでに六十を過ぎていたが、
たいへん元気で、

「では、北海道開拓のために、出かけてい
くことにしましょう。」

と、快くひきうけてくれた。

大統領は、

「仕事の成功をいのる。」

と、いって、ケプロン氏をはげました。



そこでケプロン氏は、三人の技師と共に、明治五年、六年の二回にわたって、北海道の実地調査をした。

その時、ケプロン氏は黒田次官に、

「開拓事業をするのには、なんといっても學問に土台を置いて、遠い先を見通した計画を立てることがたいせつです。それには、学校を建てて、農業の教育をほどこしていくことが先決問題でしよう。」

といった。

この考え方がもとになって、札幌農学校が設立されるようになり、クラーク先生をむかえることになったわけである。

そのころ、クラーク先生は、アメリカのマサチューセッツ州立の農学校の校長をしていた。非常に人望があつて、教師、生徒

からはもちろん、州の人々からも父のようにしたわれていた。

これより先、黒田次官はアメリカにいる吉田公使に、この農学校の教師として、適当な人物をさがしてくれるようにたのんでいた。吉田公使がケプロン氏に相談すると、クラーク先生をおいてほかにはあるまいという話になった。そこで、おそらくは断られるにちがいないとは思つたが、それでも、吉田公使はたのみにいつてみた。

クラーク先生は、じつとそのたのみを聞いていたが、「いきましよう。」

と、快くひきうけてくれた。

ところが、州では、だいなクラーク先生を、あんなに遠い日本などへ送るわけにはいかないといつて、どうしてもはなそ

うとしなかった。吉田公使もいろいろと骨をおり、ようやくのことで、「それでは、一年の休暇をとるといふことにして行つていただくよう。」というように話がまとまった。

札幌農学校にこられてからの、クラーク先生の教育の仕方は、先生自らが、身をもつてやってみせることであつた。生徒を紳士としてあつかひ、生徒を深く信じてゐることであつた。

この教育の仕方は、生徒たちを大いに自重させた。生徒たちは、じぶんでじぶんをいましめるようになった。生徒は先生を心から信頼し、先生は生徒を真に愛して、楽しい、美しい学校生活が続けられた。

先生は、はるばる、故国をはなれてきているので、さびしい時にたしなもうと思つて、ぶどう酒やビールなどを持ってきて

いた。また、すきなたばこも用意していた。

しかし、農学校の生徒たちが、酒を飲んだり、たばこをすつたりすることは、健康上よくないので固く禁じていたが、生徒たちばかり責めないで、じぶんもやめなければならぬといつて、持ち合わせの酒類やたばこを、みんなすててしまった。そのかわり、先生の官舎には、りんごやみかんなどをたくわえておき、生徒たちがたずねて来ると、それを出して食べながら楽しく語りあつた。

先生は、

「開拓者になるには、強健な身体と勇気が必要だ。」

といつて、冬になると、先生自らその先頭に立つて、よく登山をした。

次の話は、その登山の時のことであるが、有名なエピソードとして伝えられている。

札幌から十五キロばかりはなれたところに、手稲山テライマという海抜千メートルばかりの山がある。雪の深い、しかも、かなり高いこの山に登るのは、なみたいていのことではなかった。

ようやく、山のいただきに近いくところまでたどり着いた時、先生は、大きな木のえだを見上げながら、

「これはめずらしい。」
とさげんだ。

生徒たちがかけよつてみると、それは、三メートルもあるこけの一種であった。

先生は、そのこけを採集しようとしたが手がとどかない。そ

こで、先生は雪の上に両手をついて、

「黒岩くん、わたしのせなかに乗って、あのこけを採集したまえ。」
え。

といった。

黒岩という生徒はせいが一番高いので、先生がよばれたのだ。よばれた黒岩は、先生の上に乗るわけにいかず、ためらっていた。すると、先生は、

「さあ、早く上がって。」

と、命ずるようにせきたてた。

黒岩は決心をして、くつのひもを解き始めると、

「そのまま、そのまま。」

といわれた。

黒岩は、くつのままでクラーク先生のせに乗り、手をのばしてそのこけを採集した。こけを手にした先生は、いかにもうれしそうな顔をして、

「めずらしい種類だ。」

と、喜んだ。

この日は午後からふぶきとなり、下山もなかなかこん難であった。先に山からおりていた先生は、みんなのおりて来るのをふもとで待つていた。いよいよ帰ることになって人数を調べてみるとひとりたりない。

「だれだろう、まだ、おりてこないのは。」

と、先生は心配そうにみんなの顔を見まわした。

「あ、大島くんがいない。」

と、だれかがさげんだ。

「先生、ぼくたち、むかえにいつてみましょう。」

数名の生徒が、山に向かつてひき返していった。

「さん俵にこしかけて、すべりおりていくのを見たんだが。」

という人がいたので、その方へいつてみることにした。

友を呼ぶ声が、ふぶきに

ざわめく山の林にこだまし

た。それに答えて、

「おーい。」

とさけぶ声がするので、いつてみると、大島は深いあなに落ちこんでもがいてい



るのであった。大笑いしながら、みんなでひき上げてやった。

無事で帰ってきた一行を見て、先生も生徒も安心をした。

大島は、みんなの顔を見ると、

「あ、しまった。菓子の包みを落してしまった。」

とさげんで、頭をかいた。

かれは、みんなの菓子をせおっていたのである。みんななどと笑った。クラーク先生は、つかれて歩けなくなった生徒には農家から馬を借りてやり、それに乗せて帰した。

明治十年四月十六日、楽しい、なつかしい数々の思い出を残して、先生はこの学校を去ることになった。

当日、学校は休業し、先生や生徒たちは、みんなでクラーク先生を見送っていくことになった。

朝早く、クラーク先生の官舎の前に集合して、そこで記念の写真を撮った。それが済むと、めいめい、馬にまたがった。

先生について、どこまでも見送っていききたい生徒たちであったが、札幌を去る二十四キロの島松しままつという村で別れることになった。ここで昼食をしたためながら、先生を囲んでつきない思

い出話をした。

やがて、出発の時が来た。別れに

臨んでクラーク先生は、

「ボーイズ、ビ、アンビシヤス。」

(生徒たちよ、大志をいだけ。)

と。いつて、再び馬上の人となった。

早春のぬかるみを、単身、南へ向



かつて馬をかけさせていく先生の後すがたを見送って、

「先生。」

「グラーク先生。」

と、生徒たちは声を限りにさげんだ。

先生はハンケチをふりながらなんどもそれにこたえた。

先生のすがたは、とうとう、森の中に消え去っていった。

それから七十余年の月日は流れ、先生はすでにこの世にいな

い。

先生が臨終の際、

「じぶんの一生で、一番楽しかったのは、札幌農学校で生徒た

ちといつしよにくらした時である。」

と、いったという。

先生が、

「ボーイズ、ビ、アンビシヤス。」

といわれた、この一言は、今もなお生きていて、いくたの生徒
たちをはげまし、かつ、導いているのである。

学習の仕方

- 一 なぜ、「この一言」と題をつけたか、考えながら学習しましょう。
- 二 文を見なくても、話ができるようにしましょう。
- 三 クラーク先生の人格について、感じたことを文に書きましょう。
- 四 次の課と読み合わせてみましょう。
- 五 「生きていることば」について、考えてみたり、話しあったりしましょう。

(二) 教への力

クラーク先生が札幌農学校にこられたのは、明治九年八月十四日であり、その任を終えてアメリカに帰られたのは、よく年の四月十六日であるから、先生が生徒たちを導かれた期間は、わずか八か月にすぎないことになる。

たとえ、短期間ではあつても、先生から教えを受けた人たちは、それぞれりっぱな人となつて、わが日本の文化の原野を開拓し、大きな土台を築いた。

第一期の卒業生の中には佐藤昌介さとうしやうけいさんがいた。

佐藤さんは、北海道の農業を興すためには、アメリカの農法を実際に見学し、また、これを実習しなければならぬと決心をして、自分の費用でアメリカに行つた。かの地には行つたものの、衆々と農学の研究に専念することはできなかつた。まず、生活費を得るために、時には印刷工となつたり、時には新聞記者になつたりした。その余暇を利用して苦学を続け、農場であせを流して働いた。

その間に、ホプキンス大学のけん賞論文に依じて、みごと、一等に当選した。これで、佐藤さんの実力が日本の政府から認められることになり、留学生の資格を得て、研究に専念することができた。

いくたの調査をし、研究をつんで帰国し、母校の教授として、子弟の教育に当たり、やがて、北海道大学の第一代の総長とな



つた。

学者として研究と講義を続けるかたわら、その一生を北海道の農業開発につくすとともに、さらに、開拓事業と社会事業に深い関心を持ち、これに協力をした。

多くの入々にお生まれながら、八十四才でこの世を去ったが、日本最初の大学葬^{きぎ}によつて厚くほうむられた。

第二期生からは新渡戸^{ニハト}稲造^{イナヅネ}さんが現われた。

新渡戸さんは、札幌農学校を卒業して、すぐ、開拓御用係^{ニハト}となつて、しばらく農業の研究を続けていた。しかし、いつも、

「太平洋の橋になりたい。」

という大志をむねにいただいていた。

「太平洋の橋」というのは、日本の文化と西洋の文化とをとりかわすのに役にたつものという意味で、じぶんがそのたいせつな仕事をなしとげたいと望んでいたのであつた。

そのころの日本は、西洋諸国に比べて、まだまだすべての点がおおかれていた。新渡戸さんは、なんとかして諸外国の長所を一日も早くとり入れたいと思つた。また、日本のもので、これはいいと思われれることは、なるべくむこうの人たちに知つてもらいたいと考えていた。

そして、おたがいに助けあい、長所を理解しあつて、より高い、よりすぐれた文化をつくりたいというのが念願であつた。

その大きな仕事を果たすために、文化交



流の橋を、太平洋上にかけわたそうという大志なのである。

そこで、明治十七年から三年間、アメリカの大学に学び、その後、ドイツの大学で研究したが、帰国してからやはり母校の教授となり、明治三十三年、佐藤さんと共に日本最初の農学博士になった。

新渡戸さんは、さらに法律の学問を続けて法学博士の学位も受け、京都大学教授に転じ、第一高等学校長になり、おわりに東京女子大学の学長に就任した。

第一次世界大戦後、国際連盟がジュネーブに創立されると、その事務次長に選ばれて、国際政治のことに骨をおしませ働いた。その後、アメリカにわたって、日米親善のために力をつくしたが、仕事の半ばにして他界してしまった。

今後、第一の橋を思いついた新渡戸さんの大志について、第二、第三の「太平洋の橋」が、また新しくかけられることであろう。

第二期生には、内村鑑三さんもいた。

内村さんは、在学中は水産学の熱心な研究者であった。卒業してからは、聖書の研究とキリスト教の伝導に力を注ぎ、その名は広く知られ、その著作は英文によつて書かれたために世界的にさえなつた。

内村さんは、心からの平和主義者であり、また、真理たん究者でもあつた。日本がロシアと戦いをまじえた時、だれひとりとして、戦争が道徳的に罪悪であるとさげんだ者はなかつた。ただひとり、内村さんはまっ向から戦争に反対した。

そのために、内村さんは国ごとくののしられ、いたるところ



ではく害を受け、住むところさえないありさまであった。

しかし、いかなる苦しみがおし寄せようと、その信念をまげたり、すてたりするような弱々しい内村さんではなかった。いよ
いよ国を愛し、真理を愛し、平和を愛し続けたのである。この
熱情は文字どおり燃えるようなものであった。

内村さんの、この正しい、美しい精神によつて導かれた人たちがなん人もいた。それらの人たちは、今日、わが祖国日本を
ささえ、育てるために、どれほど大きな力となつてゐるかしれ
ない。

広井勇^{ひろい いさむ}さんも、同じく第二期生である。

大正十年、中国の上海^{シヤンハイ}で、上海港改良のことについて、関係
国七か国の代表が集まつて国際会議を開いたことがあつた。

その会議に、広井さんは日本の代表として出席してゐた。
会議の中心問題となつたのは、揚子江^{ヤンツォンキヤン}の下流の砂州^{サウ}をさらつ
て、航路を開設することであつた。

しかし、この工事は技術的に至難なことであつた。他の六か
国の代表は、この案に対してすぐ賛成したのであるが、わが代
表の広井さんはそうではなかつた。この難
工事が果たして可能であるかどうかを疑つ
たからである。かるがるしく会議で決定し
ても、もしてきないとなつた時には、じぶ
んたちの責任だと考えたからである。



そこで、広井さんはさつそくその実地調査をしてみた。

ところが、果たして予想していたとおり、この工事は全く不可能であることを発見したので、広井さんは、このことを科学的にはつきりと各国の代表に説明をした。

各国の代表も、この正しい論と広井さんの強い責任感とにうたれ、これに同意しないわけにはいかなかった。

広井さんは、工学博士となつて、国内の築港を初め、その他の土木工事に多くの功績を残したばかりでなく、こうして、海外における大工事にもその足せきを残した。

このほか、札幌農学校の卒業生には、東洋音韻学で名高い大島正健おしま まさたけさんがいるし、海草の研究で文化勲章ぶんかこうしょうをおくられた宮部金吾みやべ きんごさんがいる。また、北海道大学の総長をつとめた南鷹次郎みなたか じろう

さんもいる。

ここには、クラーク先生から直接に教えを受けた人や、教えを受けついだ人たちの中から、おもな人を選んであげてみたのであるが、さらに、これらの人々から教えを受けた人は、どのくらいたくさんいることであろう。

今は、そのたくさんの人たちによつて、さらに、わかいたちが導かれていく時代になっている。

こう考えてくると、ひとりの人の教えというものは、時がたつにしたがつて、だんだんにひろがつていくことがわかる。一つぶの麦の種子が成長して、いくつもの実を結び、それが、また、いくつかの実を結んでいくように。

クラーク先生というただひとりの人が、わずか八か月の間に
まいた種子が、かくもよく成長し、花を開き、実を結び、また、
花を開き実を結びして、年とともにひろがっていつている。

学習の仕方

- 一 前課とのつながりを考えながら学習しましょう。
- 二 この文に出ている「文化の開拓」という意味を考えてみましょう。
- 三 この文に出てくる人々の人格について感じたことを書いたり、もつとくわしく調べてみたりしまし
よう。
- 四 ひろがっていく「教える力」について、考えたことを話しあいましょう。
- 五 なぜ「一つぶの種から」と題目をつけたか、(一)と(二)を合わせて話しあいましょう。

二 宝石はう石のよう

(一) 短いことば

山、高きをもつてたつとせせず。

こんなことわざのあるのを、知っていますか。

これは、山というものは、たとえ、どんなに高くても、その
山にねうちがあることにはならないという意味です。木がたく
さんはえていてこそその山が人のやくにたつてしよう。木でも
これと同じことで、どんなにせいが高くても、それだけのこと
でりっぱな木だということにはなりません。この反対に、たと
え、低い山でも、小さな木でも、役にたつのはいくらでもあり、

美しいものもあるということをおいっただけです。

これは、山や木にたとえたことわざですが、このことから、いろいろなことがいわれそうです。

まず、絵について考えたらどうなりましょう。壁画のような大きなものだけが、すぐれた作品だとはいえません。小さな板に書いたような絵でも、ねうちのがある、りっぱな作品がいくつもあることは、すでにみんなの知っているとおりです。

彫刻でも、工芸でも同じようなことがいえましょう。

目に見えるものだけではありません。音楽などでも、このたとえ



があてはまるでしょう。もちろん、名曲といわれるものの中には、長時間にわたる大きなものもあります。また、それだけにどっしりとした、力強さを示すのでありますが、小曲だからといって、いちがいにはけなすことはできません。

このほか、演劇にしても、映画にしても、やはり同様なことがいわれると思います。

さて、これを「ことばの世界にあてはめてみたら、どうなるでしょう。

ことばの世界を分けると、一つは口でいうことば、いま一つは文字に書くことばの、二つになります。

どんなにおもしろい話でも、三時間も、四時間もしゃべられては、聞く方がたまりません。

書かれたもので、ずいぶん長い大作があります。日本にもあり、西洋にもありますが、いずれもりっぱなねうちをもつています。これは、けっ作だからねうちがあるのであつて、長へんだからいいものだということにはなりません。話し手や作者の努力と、そのできたもののねうちとは、おのずから別問題であります。

もともと、ことばは、じぶんの思っていることや、考えていることを、相手に伝えたいというところから生まれてきたものです。ですから、できるだけ、相手によくわかるようにすることがたいせつです。

それには、時間をかけないで、しかも、正しく伝える必要があります。そこで、わずかなことばでかんたんにくうふうをすることになります。

とくにいそがしい時とか、さわがしいところとか、または、多数の人々に知ってもらいたいような時には、くどくどといつていては効果がありません。できるだけかん明にいうことが、最も大切です。つまり、「短いことばで表現することが大事になつてくるのです。

わたしたちの毎日の生活は、この短いことばのやりとりであるといつても、さしつかえないでしょう。

この日常の言語生活で、とりわけ短いことばで書かなければならないものには、どんなものがありましたしょう。

一つには、はがきがあります。

はがきは、書く紙の大きさがきまつていて、これ以上に書くことはできません。たまには、二まいも三まいも続けて書くこともありましようが、それは例外です。一まいのはがきに、用がたせるように、きちんとまとめて書かなければなりません。二つには、手紙があります。

これは、べつに紙面が限られてはいませんから、いくらでも長く書けるわけですが、だらだらと長く書いていては、相手の人のめいわくになるばかりでなく、失礼にもなります。手紙も用事だけをまとめて書くことが望ましいのです。

むかし、ある人が、旅先からじぶんの家にあてて、「一筆啓上、火の用心、おせんなかすな、馬肥やせ。」という文句の手紙を書いたといひます。いかにもむだのない、

しかも、大事な用件をいいつくした名文句でしょう。

家の者にあてた手紙ですから、こんなことはづかいてもさしつかえはないが、快いまでにかんけつで、いおうとしていることがはつきりしているところが、おもしろいではありませんか。三つには、日記があります。

日記を書く初めのころは、ものめずらしくて、あれも書こう、これも書こうで、つい、記事が長くなつてしまいます。ノートなどに書くなら、それも書けないことはないでしょうが、書く行数やページのきまつている日記帳になると、そうはいきません。それに、いつも、くわしく書けるものではありません。

日がたつにしたがつて、だんだん書くことがおつくうになり、やつかいになつて、そのうちあきてしまい、やめてしまうよう

なことにもなります。それよりは、初めから、その日のできごとで、これはと思うものをえりぬいて、手短に書き、これを続けていく方がはるかにましです。

日記の形をかりて、創作するような場合は、これとはおのずから別のことになります。

四つには、電報があります。

これは、はがきや手紙の比ではありません。最もかんけつなことばを用いるべきです。と云って、意味をとりちがえるようではこまります。

電報は字数によつて料金がちがうのですから、いつそう、むだなことばを省かなくてはなりません。だく音や、半だく音の文字一字が二字に数えられるので、細かい注意もいりましよう。

標語も短いことばで表現するものの一つです。

交通安全週間とか、読書週間などで、これに関する標語が、町かどや電車内などにかかげられますが、一目で読めて、よくうなずけるものほど、その効果をあらわします。

その文句が口調のいいものであれば、しらずしらず、その標語を口ずさんで覚えてしまふでしょう。

標語によく似たもので、広告があります。

広告は、標語よりいつそう宣伝的な効果をあらわさなくてはなりません。より多くの人に印象づけるだけのくふうがなければ、広告としてのねうちがありません。

かんけつな表現でなければならぬことはもちろん、その文句には、いかにも新しい感じがあり、思わず人の心をひきつけ

るような、おもしろい、真実ない現わし方をねらうわけです。標語と広告とを集めてみて、どの標語がよくできてきているか、どの広告が人目につくかなど、調べてみましょう。

ことわざも、初めに書いたように短いことばでいい現わしています。短いことばではありますが、ことわざは深い、広い意味をもっています。

犬も歩けばぼうにあたる。

論よりしようこ。

花よりだんご。

にくまれつこ世にはばかる。

骨^{ほね}おり損のくたびれもうけ。

これらのことわざは、いろはがるたに選ばれたものですが、

どの一つをとっても興味深い意味があります。短いことばの中に、いろいろなものがたたみこまれていて、日常生活で思いあたることがあります。これらのおもしろいことわざでも、だれがつくったのかわかりませんし、いつ、どこで生まれたのか、それもわかりません。

ことわざに似ているものに、格言や金言の類があります。これらのものを集めて、比べてみたり、また、分けてみたりしましょう。

文学の方でいいますと、短いことばで表現されるものに詩があります。これは、どこの国でもほぼ同じことなのです。とくに日本には、短いことばで表現する詩の形が二つあります。

一つは和歌であり、いま一つは俳句であります。

和歌は、形からいうと、上の句が十七字、下の句が十四字、合わせて三十一文字、まるで電報のように短いことばで表現されているのです。

どうして、このような短いことばの形で歌うようになったのか、それはともかくとして、大むかしからずっとこれが続き、今でもなおさかんに歌われていることを思えば、和歌は、何か日本人の生活と深いつながりをもっているように思われます。

もちろん、短い形ですから、こみいった思想や主義などを表現されないことは、初めからわかっていることです。この短い詩形にふさわしい感情なり、思考なりを歌いあげるところに、これを愛する人たちの道があるのではないかと思えます。

ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブリキの屋根に
月うつる見ゆ

なんでもない情景を、さらりと歌いあげたものですが、よく読んでみると、静かな月夜の風景がもしだされてくるではありませんか。三十一文字などでは、いいあらわせそうもない、いきいきとした風景が見えてくるではありませんか。

この和歌は、正岡子規まさおかという人の作品ですが、これに続いて次のような和歌がなっています。

ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなび
ける見ゆ
ガラス戸の外につくよをながむれどランプのかけ
のうつりて見えず

照る月の位置変わりけん鳥かごの屋根にうつりし
かげなくなりぬ

これらのものを続けて読みますと、情景がいつそう明らかに
なります。

俳句は、和歌の形よりさらに小さく、おどろくべき短い詩形
であります。五七五、たった十七字です。おそろく、世界最小
の詩形でしよう。

この短いことばの中に、作者がちゃんと顔をのぞかせたり、
美しい風景をおしこんだり、無限の感じをふくめたり、自然と
いつしよに起居したりしています。和歌より十四字少なく、和
歌の上の句だけの字数ですが、作者たちは、ここを自由の天地
として、思うままにかけめぐっています。

山路きてなにやらゆかしすみれ草
春の海ひねもすのたりのたりかな
われときて遊べや親のなはずめ
菜ばたけや月は東に日は西に
夕風や白ばらの花みな動く

どの句を見ても、それぞれに美しいものを豊かにだきかかえ
ているではありませんか。

ことばが短くなればなるほど、いおうとする志が言外にあふ
れてきて、それがわたしたちの心におしよせてきます。

人々に深い感めいをあたえることばは、いろいろありますが、
強く心にひびき、いつまでもわすれられないことばは、多くは
「短いことば」であります。

すぐれた学者や芸術家のいい残していった短いことばの中に、名言として、永遠に光をはなっているものがたくさんあります。ですから、いかに「短いことば」といえども、限りない教えと力にみちた、宝石ほうしのようにいいもののあることをわすれてはなりません。

学習の仕方

- 一 短いことばのたいせつなわけを考えながら学習しましょう。
- 二 はがき、手紙、日記、電報などの書き方について考えたり、実際に書いてみたりしましょう。
- 三 ことわざ、格言、金言などを集めたり、意味を考えたり、分けてみたりしましょう。
- 四 和歌、俳句を味わってみたり、作ってみたりしましょう。
- 五 次の課と合わせて学習しましょう。

(二) 心の形

ふきのとう

平福穂

ふきのとうはちに移してわがへやの明かるみに置き見れば
楽しも

伊藤左千夫

しばらくを三間うちぬきて夜ごと夜ごと子らが遊ぶに家わ
きかえる

正岡子規

紅くれないの二尺じやくのびたるばらの芽のはりやわらかに春雨はるあめのふる

山川のあらき流れのふちにしていのち静けくさく花のあり
岡本かの子

遠足の小学生徒うちょうてんに大手ふりふり往来通る
木下利玄

水打てば青ほおずきのふくろにもしたたりぬらんたそがれ
にけり
長塚節

おさなきはおさなきどちのものがたりぶどうのかげに月か
たむきぬ
佐々木信綱

こおろぎが清くすずしく鳴きいでぬ雲の中なるおくやまに
与謝野晶子

して

東の朝やけ雲はわが庭のきびの葉ずえのつゆにうつれり
若山牧水

うすあかく雪に流れていり日かげあら野の汽車のまどを照
らせり
石川啄木

雪ふれば山よりくだる小鳥多ししようじの外に日ねもす聞
ゆ
島木赤彦

木の間より冬の朝日のすがしくて時ならぬ土のかおりいき
づく
北原白秋

学習の仕方

- 一 どんなありさまや、心もちを歌った和歌が、よく味わつてみましょう。
- 二 暗しうがでできるよりになんども読みましょう。
- 三 この和歌がどんなじゆんじよにならべてあるか、考えてみましょう。
- 四 作者と作品について調べてみたり話しあつたりしましょう。
- 五 和歌を作つてみましょう。

水の音

古池やかわずとびこむ水の音
 しずかさや岩にしみいるせみの声

芭は
 蕉しやう

蕪わ
 村むら

富士一つうずみ残してわか葉かな
 夏川をこすうれしさよ手にぞうり

一いち
 茶ちや

やれ打つなはえが手をする足をする
 やせがえる負けるな一茶ここにあり

千ち
 代しろ
 女によ

あさがおにつるべとられてもらい水
 きてみれば森には森の暑さかな

子し
 規き

わがそでにきてはねかえるいなごかな
 ところどころ菜畑青きかり田かな

夕月や納屋もうまやも梅のかけ
荷車に母乗せて行くひがんな

落ちざまにあぶをふせたるつばきかな
朝寒の顔をそろえしつくえかな

学習の仕方

- 一 暗しようにできるよりに読みましょう。
- 二 どんなことばで季節をあらわしているか、気をつけて読みましょう。
- 三 そのありさまや心もちがどんなに歌われているか、話しあいましょう。
- 四 俳句を作ってみましょう。

鳴めい
雪せつ

漱そう
石せき

文は人なり

時は金なり。
自業自得。
ゆだん大敵。
なきづらにはち。
急がばまわれ。
百里の道も一歩から。
ちりもつもれば山となる。
雨だれも石をうがづ。
さるも木から落ちる。

へたの長談議。

人のふり見てわがふりなおせ。

およばざるはすぎたるにまされり。

かん難、なんじを玉にす。

楽は苦の種。苦は楽の種。

天は自ら助くるものを助く。

木もと竹うら。

まちがいを知るは真理への一歩。

幸運とガラスはこわれやすい。

おのれの欲せざることを人にほどこすなかれ。

人々は悪を行う時、悪魔まをおそる。

正しきものは強きものなり。

文は人なり。

健康は第一の財産である。

知って行わざれば知らざるに同じ。

孔子
ゲーテ

カーライル
フローベル
エマトソン
貝原益軒

学習の仕方

- 一 ことばの意味や教えをよく考えてみましょう。
- 二 これらのことばと、私たちの生活のつながりを考えてみましょう。
- 三 これらのことばを、わかりやすくとえ話にしてみましょう。
- 四 前課の「短いことば」と照らし合わせてみましょう。
- 五 「文は人なり」を話題にして、話しあいをしましょう。
- 六 このほか、いろいろなことばを、集めてみましょう。

三 日本朝

(一) 東京だより

おじさん、お元気ですか。

いつか送っていただいたおん地の絵はがきが、わたしのへやにかざつてありますので、それを見ては、おじさんのことを思いたしています。

今ごろ、ハワイのけしきはどんなでしょうか。絵はがきで見る、このきれいな海岸を、ロぶえのすきなおじさんが、じょうずにロぶえをふきながらさんぼしているすがたが、目の前にうかんでくるようです。

こちらも、うめの花がさいて、うぐいすが庭にきては楽しそうに鳴いています。毎年、耳にするうぐいすの声ですが、聞いたたびに新しい気持ちで、いいなと思います。

父も、母も、元気で働いています。わたしは、もうじき、六年生に進みます。六年になったら、あれもしたい、これもしたいということがたく



さんあります。小学校の最後の学年ですから、できるだけ楽しく、精いっぱい勉強しようと考えています。

この間、おじさんから、「東京は、このごろどうなっているか。」というおたずねがありましたから、きょうは、そのご返事を書こうと思います。

長い間はなれていらつしやるおじさんには、東京のことが、やはり、なつかしく、気にかかるとすね。

東京は近ごろになつて、だんだんもとのように家が建ちならんで、町が整つてきました。

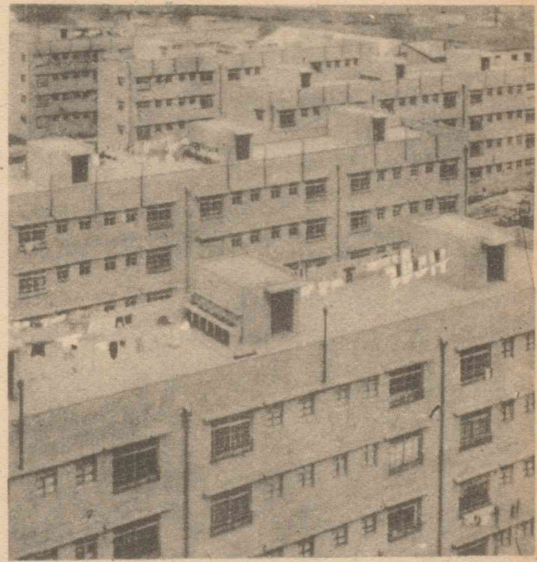
ひとときは、あちこちがさびしい焼野原になつていたり、町のまん中に麦ばたけができたりしていました。それが、新しい都市計画によつて、道路が作られ、それにそつて、バラック建

てではありますが、人家がつぎつぎに建てられました。

戸山が原を初め、大きなアパートがいくむねも建てられました。建てられると、それには、すぐ、人が住みこんで、たちまち満員です。

なんとといっても、東京は働き場所も多く、また、勉強するのにも都合がいいのでしよう、地方から出て来る人が多く、東京の人口はふえる一方です。

それにしても、住むためには家が第一なので、東京はその家屋の建築にいつしよけんめいです。この間、わたしは、どの町でどんな家が造られているか、また、どんな計画があるかということを調べて、「家屋建築時代」という題で、作文を書きました。



住たくができるにつれて、店も
できますし、事務所や会社なども
できます。中でも、最も目だつて
たくさんできたのは、——なんだと
思いますか。それは、えい画館な
のです。

こんなところだと思うのですが、見にくる人がかなり多いのは
はおどろいています。

銀座四丁目あたりを歩いてみますと、各商店のショーウイン
ドがきれいにかざりたてられて、そこにならべてある品物も、

ずいぶんりっぱなものです。ただ、ねだんがたいへん高くなつ
ているとのことです。わたしたちには、そのねだんの高いのが
よくわかりません。

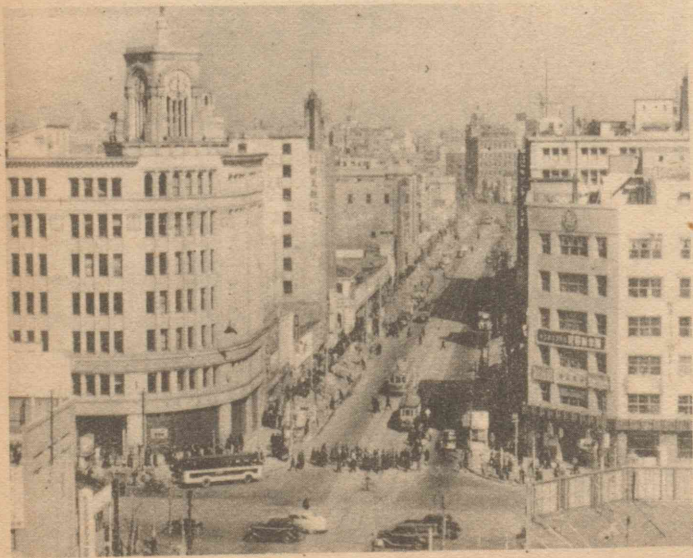
この間も、父といっしょに町に出
た時、スポンジボールをひとつ買っ
てもらいました。

「いくらだい。」

と父がいったので、

「百二十円です。」

というと、父はびっくりしたように
しました。わたしは、友だちがみん
な、そのくらいのねだんで買って



るので、

「ふつうのねだんでしよう。」

というど、父は、

「むかしは、一円もしなかつたものだ。」

といったので、がえつて、わたしの方がびつくりしました。

わたしのうれしいのは、上野動物園にいろいろな動物がやってきたことです。インドから象がきました。アメリカからはライオンもきました。たいへんな人気で、動物園はいつもにぎわっています。

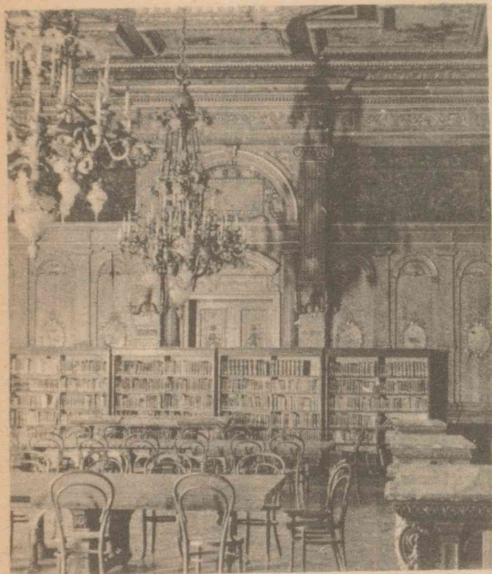
もう一つうれしいことは、図書館があちらこちらにできたことです。わたしの学校でも、学級文庫ができ、学校図書室もりっぱにできあがりしました。P・T・Aの方々の力によつてでき

たものですが、みんなが学習するのに、どれだけ助かっているかしれません。「心の給食は図書室で。」こんな標語をろうかにはり出したりしています。

せんだつて、初めて国会図書館にいつてきました。ここは、もと、陛下が皇太子のころおいてになった赤坂離宮で、建物が

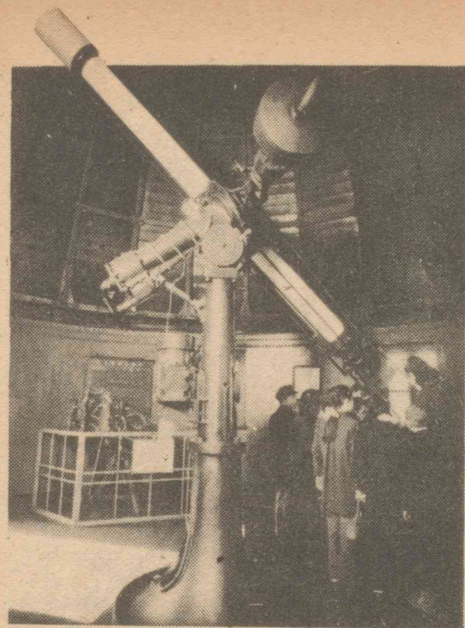
あのとおりりっぱな上に、図書えつらん室などはもつたいたないほどきれいで、明かるい所でした。こんな所で読書していると、たのしくて時間のたつのもわすれてしまいます。

戦後になつて、いつぱんに公開され、解放されたものがいくつもあり



ますが、この国会図書館もその一つです。

新宿ぎよえんもそうです。去年の秋、母につれられていつて
みましたが、あの静かな、きれいな庭園は、まるで絵のようで
した。日本画のすきなおじさんが見たら、どんなに喜ばれるだ
ろうと、母と話しあつたことでした。



上野には、国立博物館、美術館、科
学博物館などが、そのまま残つていま
す。わたしの組の人たちが科学グルー
プを作つていますが、その人たちは、
ほとんど日曜日ごとに科学博物館にい
つて、研究を続けています。第二の湯
川秀樹さんになつて、ノーベル賞をも

らうのだといつてゐる友だちもいます。

銅像はほとんどりはらわれたり、こわれたりしましたが、
犬をつれた西郷さんのは残つていて、子どもたちにすかれてい
ます。もし、上野のおかにあれがなくなつたら、どんなにさび
しくなるでしょう。

いつか、おじさんが、あれを写真にとつて、ひきのばしたこ
とがありましたね。

上野で思ひだしましたが、不忍の池について、一時やかまし
く論議されたことがあります。それは、これをうめたてて野
球グラウンドにしてしまおうという説と、このままに残しておこ
うという説があつたのです。どちらにも、それぞれいいところ
があるので、なかなか決まりませんでした。

おじさんはどう思われますか。おじさんは、あとの説にきつと賛成なさるでしょうね。

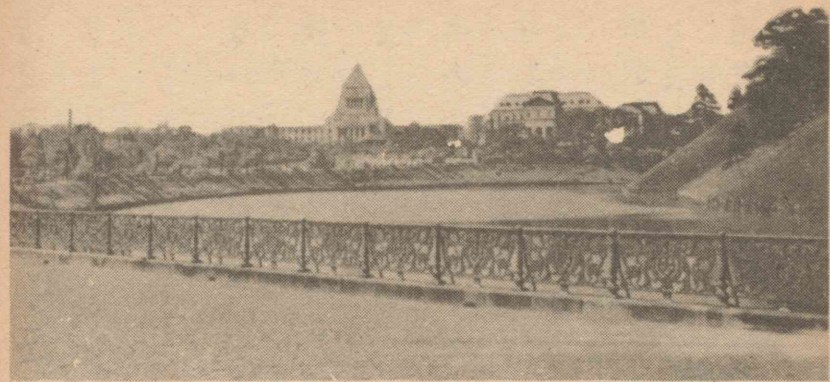
わたしは、前の説に同意したのでした。みんなが楽しめるし、健康にもいいし、土地を活用することにもなると思つたのです。しかし、考えてみると、水の風景の少ない東京で、あれをつぶしてしまつたら、ずいぶんさつ風景になるだらうと思ひました。ああしたゆとりのある自然の美を、東京が、どこかにいだいているということもいいことだと思ひました。東京人の目をなくさめてくれる一点景になるだけでもいいと思つたのです。

この問題を、わたしの学級でも討議をしました。賛否両論で、どちらとも決まらずじまいでした。結局、どうなつたと思ひますか。どちらも生かしたのです。つまり、不忍の池はその

まま残し、そのそばに、野球グラウンドを造らうということになりました。

こうした、ささいな問題でも、限られた人たちの考えて決めないで、なるべく多くの人々と相談し、おたがいに話しあつて決めていくようになったことは、大きな進歩だと父がいつていました。みんなの意見で、みんなのために、いろいろな仕事が進められていくようになったのは、東京だけのことではありませぬ。

いつときは乗りものが少なくて人が混雑し、たいへん不便でしたが、このごろは、大きなバスがたくさん走つています。き道なしの電車も走るといいますし、地下鉄も拡張されるそうですから、いつそう便利になります。



天皇皇后両陛下のおいでになる皇居前の松の林はもとどおりで、静かに水をたたえたおほりには、水鳥が集まってきたておよいでいます。国会議事堂の白い建物をながめながら、永遠に平和な国を築いていかなければならないと、いつも考えさせられます。役所で新しくできたものに最高裁判所があります。わたしたち国民が、法律によって、自由に、楽しい生活を営んでいくのを守ってくれるのです。

「平和日本の再建は首都の再建から。」ということ、東京の産業・経済・交通・保健・

防災・美観などに重点をおいて、めざましい復興ぶりを示しております。しかも、そのもとなつていゝものは、みんなの力の結集であつて、これこそ、新しい日本の、見えざる原動力だとわたしは信じています。

これからの東京は、人口配分計画、土地利用計画、施設計画など諸計画によつて、どんどん復興されていくでしょうが、それはこのたくましい原動力によつて進められることになるでしょう。



別ぶうで、東京の新聞を二三種お送りいたしますから、ごらんください。

こんど、おじさんが、ハワイから一気に飛行機でとんで来る日をお待ちしています。

では、きょうはこれでおしまいにします。さようなら。

学習の仕方

- 一 再建されていく日本のことを考えながら学習をしましょう。
- 二 復興されていく東京のすがたが、どんなに表現されているか書き出しましょう。
- 三 新しい日本を築いていくために、一番たいせつなことはどんなことか、書いてみましょう。
- 四 あなたの地方のようすとくらべて話しあいをしましょう。
- 五 「見えざる原動力」を話題にして、討議しましょう。

(二) 朝がくる

谷あい

山の谷あいに、朝がきた。

毎日、同じように朝がきた。

けれども、ちがう朝がきた。

けさの谷川は、喜んでいる。

朝の光をすいながら、

さらさらと歌っている。

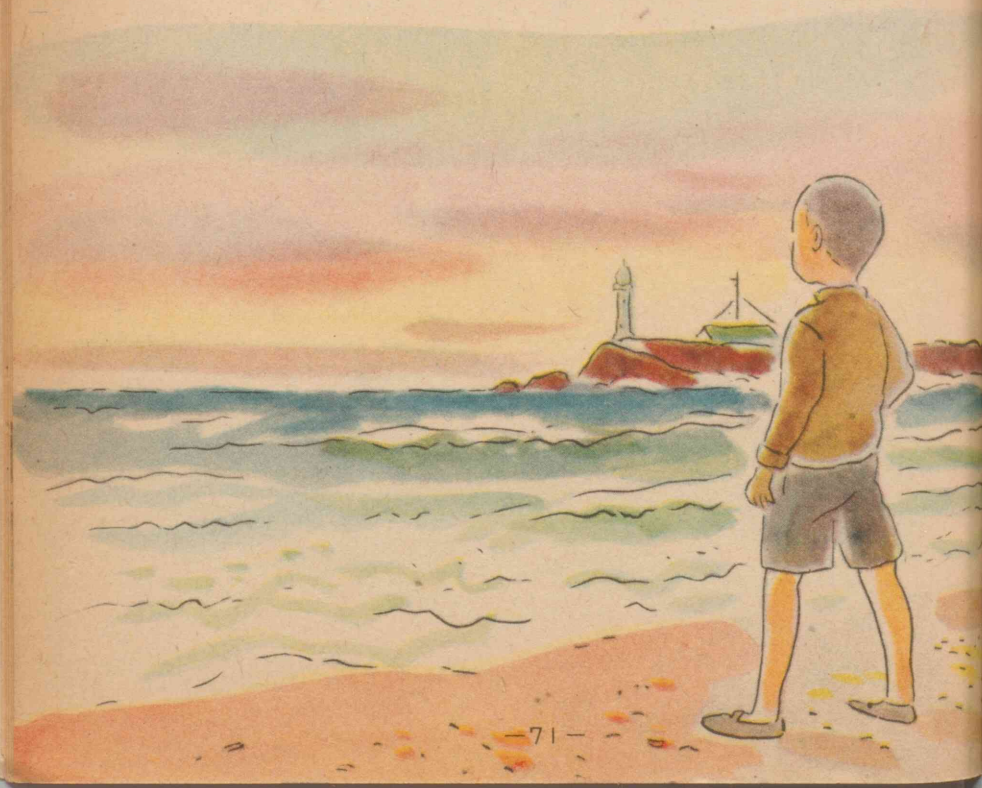




海べで

むこうの山のみねに、光がさしてきた。
すぎの木がいちどに目をさました。
小鳥が、すぎの木の精のように飛びたつた。
どこかの坂を、バスがのぼってくる。
ブルブルブルブル、こだましている。
竹やぶにも日がさしてきた。
山の谷あいには、朝がきた。
毎日、同じように朝がきた。
けれども、新しい朝がきた。

波が高い。
ゆうべのしけのなごりが、
まだ、岸をかんでいる。
なんとまばゆい海だろう。
目を細くして見ると、
まぶたのうらが、
ばらの花びらみたいだ。
波が、一まい、一まい、



光をせおつて、
わっしよい、わっしよい、
おしよせてくる。
光にまみれ、
光にたたかれ、
光とわらいこけながら、
おしよせてくる。

「海は、なんて広いんだらう。」
こんなあたりまえなことを、
また、いった。

「海は世界を包んでいる。」

わかりきったことを、

また、いった。

でも、ほんとうに海は広い。

世界を包んでいるから、しかたがない。

「おつと、あぶない。」

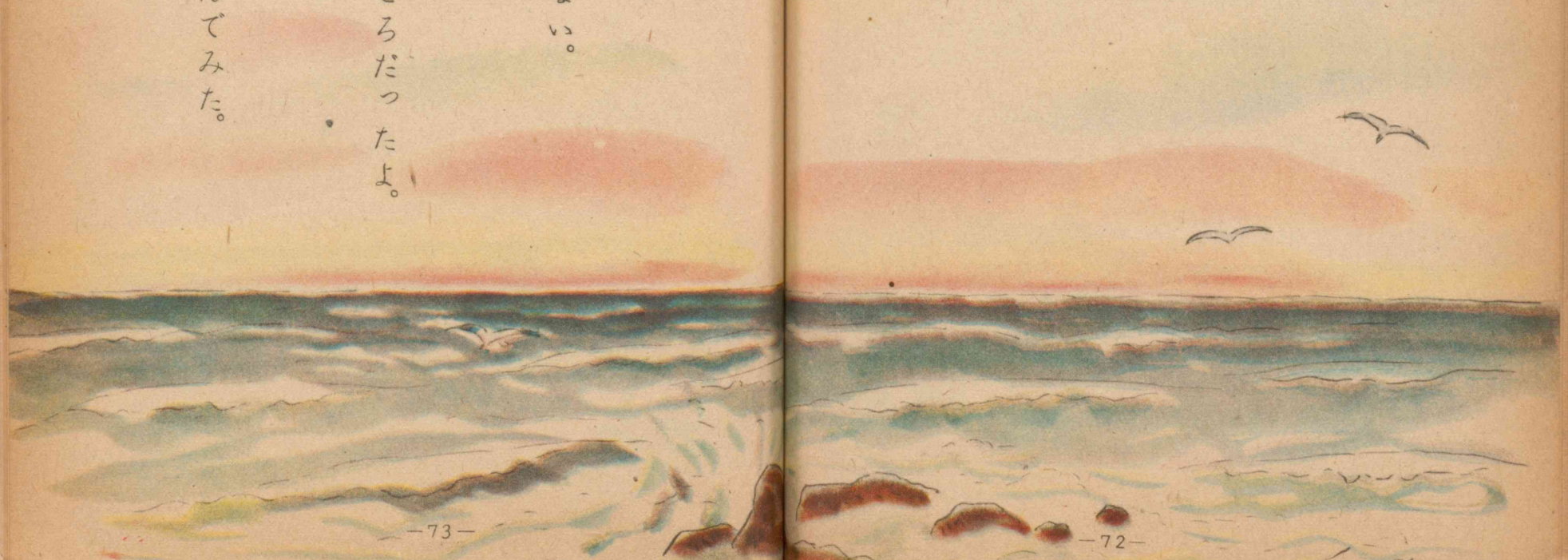
もう少しして、おまえさんをふむところだったよ。

かにさん、

おい、まだ、ねむっているのかい。」

ぬれたすなを、おどかすようにふんでみた。

かには動かない。





光にすいて見える、
一まいの木の葉をみつめながら、
私は思う。
なんと細かな葉脈のあみ、そのちつ序。
静かな営みとその活力。
それら無数の木の葉は、
一本の大木につらなって、
永遠の大地に根ざし、
自由の大地に生きているのだと。

日本の朝

また、ふんでみた。
かには、によつきりとはさみをあげた。
すばやく、横ばいを始めた。
そこに、波がざぶんときた。
かには、たちまち、もぐってしまった。
元気だな。
むじやきだな。
わたしは、かにに心がひかれた。
小さな生きものに心がひかれた。
朝日よりもまばゆい、
海をながめながら。

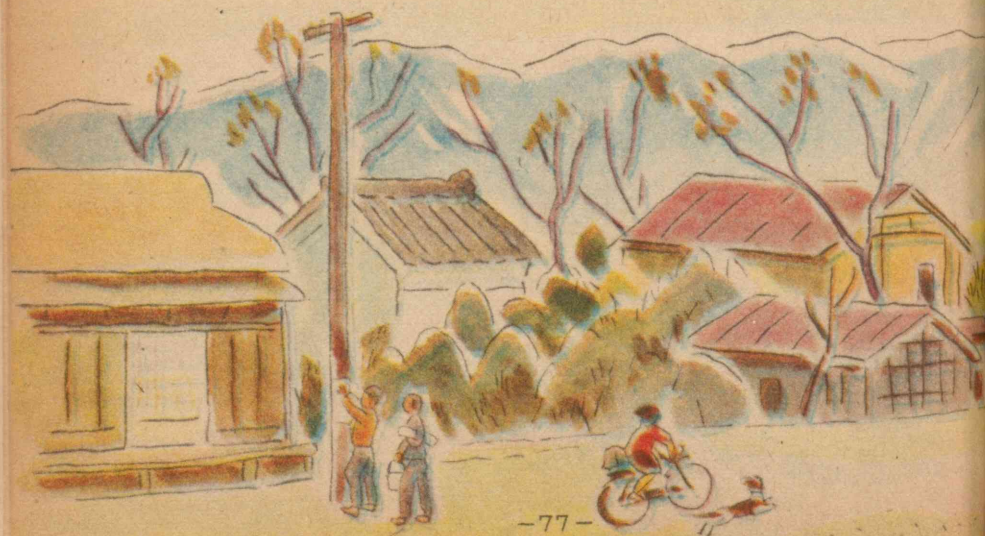


畑で、朝の仕事にとりかかった農夫、
自転車のペダルをふんてお使いにいく女の子、
選挙のビラをはつてゐる青年
それらのひとびとが、
みんなばらばらだということがあろうか。
私は思う。
それぞれに一すじの葉脈、一まいの葉、
ひとりびとりが社会につらなり、
日本を育てていく、
一体の心、わかい力だど。



早春の大地は、
すでにみどりのきおくをよびさまし、
春の光に、
山なみの残雪は白いハンケチをふつて、
寒い季節に別れを告げる。
生命の力は地にわき、
希望のささやきが空から聞える。

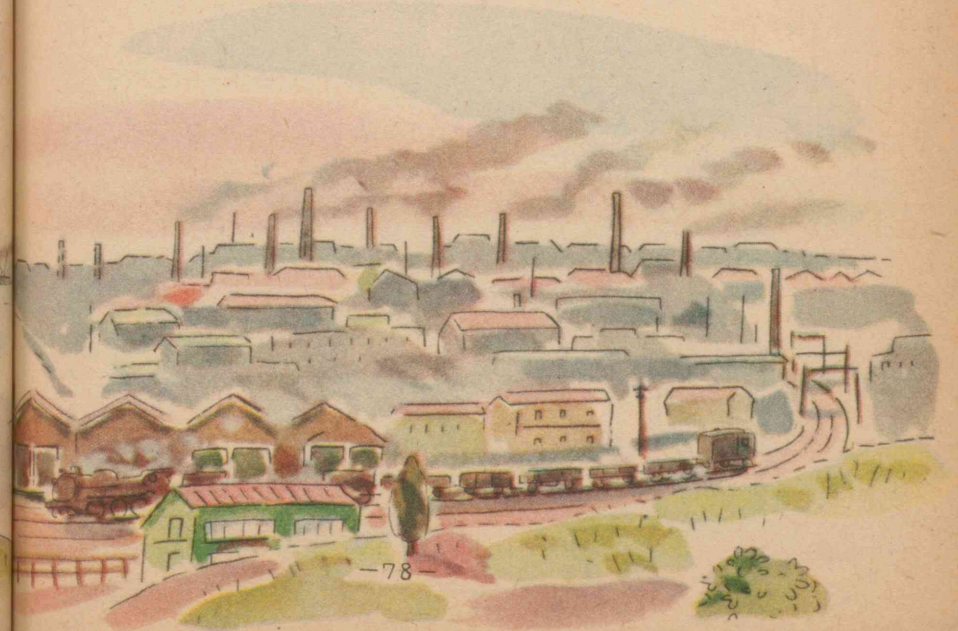
新しい太陽がのぼる。
日本列島を、
健康な少年のほおのようにそめながら、



大きな太陽がのぼる。
目をさました島々が、
光の波でそのからだをあらう。
血管に新しい血が流れるように、
カのみなぎるレールの上を、
ごうごうと汽車が走っていく。
工場に鉄のひびきが起り、
朝もやにそびえた高いえんとつからは
むらさきのけむりがのぼり始める。
起重機のたちならぶ港から、
きょうの日を祝福するように、

汽てきが空になりわたる。

朝がきた、大きな朝が、
日本の朝が、
さわやかなわか葉のそよぎ、
平和な日の光、
活気にみちた人々の動き。
私は思う。
自然の春、人生の春、
そして、日本の朝に、
私は立っているのだと。
私は思いつきりのびるのだと。



学習の仕方

- 一 三つの詩は、それぞれ何を歌ったものが、はつきりさせましょう。
- 二 これらの詩を読んで、感じたり、考えたりしたことを書き出しましょう。
- 三 大題目「日本の朝」とのつながりを考えてみましょう。
- 四 この文を中心に「日本の再建」について話しあいましょう。
- 五 「緑の国」「地球」「日本の朝」の三つの本が、どんなつながりをもっているか、一つ一つの題目について調べてみたり、考えてみたりしましょう。

一年間の国語の学習について反省しあいましょう。
 六年になったらどんなにして国語の学習をするか、計画をたてたり、話しあったりしましょう。

新しいことば

4	ページ 初年	原始林	開拓 <small>たく</small>	12	種類		
5	任務	来意		13	さん俵		
5	指導者	派けん	農商局長	14	休業		
	快く			15	集合	馬上	臨んで
6	実地調査	土台	ほどこして	16	大志	ぬかるみ	单身
	人望	教師		18	ハンケチ	臨終	
7	公使	断られる		18	よく年	期間	原野
8	骨おり	ようやく	自重	19	第一期	農法	
	信頼 <small>しんらい</small>	故国		19	実習	余暇	苦学
9	たはこ	禁じて	責め(ないで)		農場	けん賞論文	留学生
	官舎	強健	登山		資格	子弟	
10	エピソード	しかも	なみたいてい	20	開発	大学葬 <small>だいがうさう</small>	太平洋
	こけ			21	西洋諸国	理解	助けあい
11	せい	ためらって	命ずる		交流		

42 (変わり)けん 最小 起居
 43 山路 志 言外
 44 感めい 紅くれなゐ
 45 宝石 夜ごと
 46 ふきのとう 夜ごと
 47 春雨 夜ごと
 48 うちようてん ほおずき
 49 どちら おさなき
 50 葉すえ あら野 時ならぬ
 51 古池 かわず
 52 つるべ いなき
 53 納屋 落ちごま
 54 自業自得 ゆだん
 55 長談議 幸運
 56 なんじ 欲せざる

53 悪魔 絵はがき
 54 おん地 ハワイ
 55 精いつばい 焼野原
 56 アパート 満員
 57 商店 ショーウィンド
 58 スポンジボール
 59 えつらん 陛下 皇太子
 60 赤坂離宮
 61 国会図書館 新宿ぎよえん 日本画
 62 国立博物館 グループ ノーベル賞
 63 銅像 ひきのぼし やかましい
 64 論議 うめたて グランド
 65 つぶす さつ風景 点景
 66 討議 結局
 67 ささいな き道 地下鉄
 68 拡張

22 農学博士 学位 就任
 23 国際連盟 創立 親善
 24 他界 聖書 キリスト教
 25 伝導 英文 平和主義者
 26 たん究 罪悪 国ぞく
 27 はく害 信念 熱情
 28 開設 出席 責任
 29 同意 築港 足せき
 30 文化勲章 総長 音韻
 31 種子 彫刻 工芸
 32 ことわざ 彫刻 工芸
 33 演劇 しゃべられて けなす
 34 大作 けつ作 長へん

33 おのずから やりとり
 34 かん明 例外
 35 たまに 旅先 一筆啓上
 36 失礼 かんけつ 行数
 37 用件 やつかい
 38 おつこう 比 料金
 39 創作 比 料金
 40 だく音 半だく音 広告
 41 交通安全週間 ロずさむ
 42 宣伝 印象づける
 43 論 しょうこ だんご
 44 はばかり くだびれ
 45 格言 金言 和歌
 46 俳句 金言 和歌
 47 詩形 ふさわしい 思考
 48 情景 あかし たなびく

66	天皇	皇后	(国会)議事堂
	最高裁判所	保健	
67	防災	美観	人口配分計画
	土地利用(計画)施設(計画)		
68	別ぼう		
70	精	こだま	
71	しけ	なごり	まばゆい
72	せおつて	まみれ	わらいこけながら
	あたりまえ		
73	わかりきった	かに	
74	によつきり	横ばい	むじやき
75	葉脈	ちつ序	営み
	活カ		
76	ペタル	選挙	ピラ
	一体		
77	早春	大地	残雪

78	生命	日本列島	
	みなぎる	えんとつ	起重機
79	そよぎ	人生	
	次(4)	派(5)	酒(8)
	後(66)	暑(49)	丁(58)
	他(22)	徳(23)	罪(23)
	俵(13)	臨(15)	総(19)
	就(22)	盟(22)	宣(37)
	禁(9)	責(9)	混(65)
	給(61)	陸(61)	

54ページ
55ページ
写真は第八軍航空隊許可済

本書の中、とくに新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

東京だより 石森延男
さしえ
関合正明 榎原健三
河野鷹思 そうてい

新国語 五年 下
日本の朝
小国530

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE SEP. 14, 1950)

昭和二十五年九月十四日 印刷
昭和二十五年九月十八日 発行

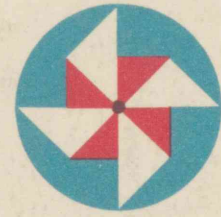
定価 円

著作者 垣内松三
八木橋雄次郎

発行者 光村図書出版株式会社
代表者 大江恒吉

印刷者 光村原色版印刷所
代表者 光村利之

発行所 東京都品川区東大崎一丁目五三三番地
光村図書出版株式会社



5
下

なま光

広島大学図書

013044980606



光村図書出版株式会社